

「漢民族をどう見るか」の特集にあたって

編集部

日進月歩の変化を遂げつつある人口大国中国という表層の奥には、その社会や文化の本質や多様性が隠されている。本特集では、抽象化された「中国」や「中国人」を対象とせず、中国でもっとも有力な主体である漢民族を取り上げ、その社会と文化を構成する本質および他民族との境界を読み解くことを通して、中国社会の本質や多様性を理解することを企図した。

一三億の中国人は、大別すると「漢民族（漢族）」と「少数民族」とに分かれる。一二億近い人口を有する漢民族は一つであるのに対し、一億人しかいない少数民族は五五もある。しかしながら、少なくとも日本では、中国の少数民族と言えはすぐに「華やかな衣装」「チベット、ダライ・ラマ」「モンゴル族の相撲と競馬、民謡」「少数民族の言葉」といった具体的なイメージが浮かぶようだ。これに対して、圧倒的な人口の漢民族については却ってそのイメージは鮮明でなく、「漢民族すなわち中国人」という曖昧な思いしか持たれていないかもしれない。漢民族が中国

人、漢民族社会は中国全体社会の代表という認識は確立されている観がある。

しかし、漢民族は同じ中国人である少数民族との間にはつきりとした社会的文化的境界をもちながら、その内部にも千差万別といつてよいほどの多様性を有する。こうした多重性をもつ漢民族をどのように理解すれば立体的な漢民族像がよりいっそう鮮明に描けるのか、我々中国研究者の課題である。ただしそれは漢民族社会や文化の絶対化を旨とするものではない。

本特集では新たな問題提起の可能性を提示したい。特に文化人類学の視点で中国研究を行う研究者に対して、漢民族と少数民族社会研究の相対化、関連分野とのクロスの可能性などの問題を提起することである。というのは、中日両国ともに、「漢民族社会・文化研究」と「少数民族社会・文化研究」といったはつきりとした分業体制をすでに体系化し、それぞれの研究者は相対する民族社会を研究しようとする現状があるからである。ただし中日両国にお

いて、その様相は次のような相違も見せている。

中国では漢民族社会研究を一括して中国研究と位置づけている。漢民族地域は全般的に中国の地域社会なのであり、「漢民族社会」という表現は極めて稀である。その一方、少数民族地域はそのまま「中国少数民族地区」と表現されるのが一般的であって、少数民族社会を中国社会としない。具体的にいえば、漢民族地域にある農村は中国農村社会と表現されるが「漢民族の農村社会」とは言わない。同様に少数民族地域にある都市は少数民族地域の一部としか表現されない。漢民族社会や文化が中国社会の代弁者であり、少数民族社会の位置づけは曖昧なのである。このように境界が画定されたのは、中国国内学界の研究体制にも関係があるのだろう。

一方、日本の場合は、文化人類学の研究は「漢民族社会・文化研究」と「少数民族社会・文化研究」と別々に行われ、さらには地域研究という視点でそれぞれの研究が中国よりも細分化されている。このため、地域別、民族別に行われてきた精緻な研究成果が蓄積されているといえよう。しかしながら、こうした分業体制のもとで、中国全体社会さえ「漢民族」や「少数民族」という個別の表象にバラバラにされた。そこで近年では、分業体制を打ち破るために、日本側の研究者に漢民族研究と少数民族研究とを相対化する動きも見られる。本特集の意図を十分に理解して

くださった座談会参加者や執筆者の言説にもそれがみられるだろう。

それと同時に、中国文化・社会の代弁者を示すのに「漢族」と「漢民族」という二つの語彙があることは、日本と中国の学界に共通した現象である。「民族」という語彙が中国に登場する以前、「民」は主に社会階層的な「たみ」、「族」は血縁的結合である「一族」を意味し、歴史・文化・アイデンティティを共有する共同体を示す「民族」とはまったく異なる意味合いを持っていた。しかし、「族」と「民族」の意味内容を推敲する作業がまだ展開されていない結果、あるいは「族」と「民族」の意味合いを区別する必要はないとする考えや、さらには研究者それぞれの考えに基づいて、現在のように「漢族」と「漢民族」が平行して使用されるようになったのだろう。この現象自体が中国研究には数多くの課題があることを物語るといえよう。本特集ではとくにその表記を統一しない方針を採った。すなわち、座談会参加者や執筆者の各自の表記をそのままに保留している。

最後に、座談会参加者や執筆者から賜った多大の協力に感謝したい。各位の問題意識は企画者を大いに刺激し、民族研究体制再構築の必要性を改めて認識させた。本特集を通して、読者が抽象的な中国人のイメージを具体化し鮮明にするならば、企画者として幸いに思う。

(高明潔)